

プラグマティック・モダリティという捉え方

高士京子
名古屋外国語大学

Abstract:

Japanese predicates generally include modality markers (e.g., sentence-final particles, relationally specific forms of the copula) which express the speaker's standpoint much more frequently than English predicates. Thus, researchers such as Matsumoto (1989) and Ide (1992) claim that the Japanese way of communicating differs from that of English speakers in that it is all but impossible to express propositional content without modal modification. In other words, a Japanese utterance necessarily indicates where the speaker stands in a particular context, while an English speaker may distance him-/herself from a speech context and make pronouncements of a more "objective" nature.

This paper defines the notion of "pragmatic modality" as those elements which express the speaker's contextualized perspective, including forms of address, both what is said and left unsaid, at what point in a conversation particular statements occur, etc. It then argues that the notions such as "territory of information," "discernment (*wakimae*)" "face," "dependence (*amae*)" and "inside vs. outside" play key roles in forming the speaker's perspective. Finally, the applicability of the aforementioned key concepts to explanations of interlingual politeness phenomena (including inappropriateness) will reveal the significance of analyzing Japanese politeness phenomena from the perspective of "pragmatic modality."

1 はじめに

日本語話者のプラグマティック・コンペテンス、中でもポライトネス・ストラテジーを考察する際、Brown & Levinson (1987)が提唱する普遍的理論としてのポライトネス学説では説明しきれない要素があることはMatsumoto(1989)、井出(1992)等によって論じられてきた。従って、本稿では日本語におけるポライトネスを考察する際には、普遍的理論としてのポライトネス学説のみではなく、より総括的なプラグマティック・モダリティという観点から捉えることの必要性を考える。つまり、本研究では「ポライトネス学説のフェイス」、「情報の縄張り論」、「わきまえ論」、「甘えの概念」「ウチ、ソトの区別」等がプラグマティック・モダリティの基盤をなしているとみなし、日本語学習者の語用論上不適切な発話をこれらの概念を通して考察することで、日本語教育におけるプラグマティック・モダリティという捉え方の重要性を論じる。(注1)

2 プラグマティック・モダリティ

スピーチイベントは「命題」、「モダリティ」から構成されていると言われていたが(注2)「モダリティ」が「コンテクスト」と密接なかかわりをもつことは、言うまでもない。井出、桜井(1997:135)は、

- 26 日本語と英語の述語形式にみられるモダリティ表現を比較した結果、「日本語は、コンテキストの捉え方にもとづくモダリティが述語形式で示されているのに対し、英語では日本語ほどコンテキストに依存しているモダリティが述語形式で示されない」と述べている。つまり、日本語では、「のだ」や「みたい」のように比較的コンテキストから独立して、命題内容の視点に支配されたモダリティ表現も存在するが、終助詞の「よ、の、ね」や丁寧体の「です、ます」のように話し手と聞き手の関係など、「コンテキスト」の視点に支配されたモダリティ表現もあると説明している。従って図1に見られるように、日本語では命題、モダリティ、コンテキストの境界線が英語と比べるとはっきりしないのだと述べている。

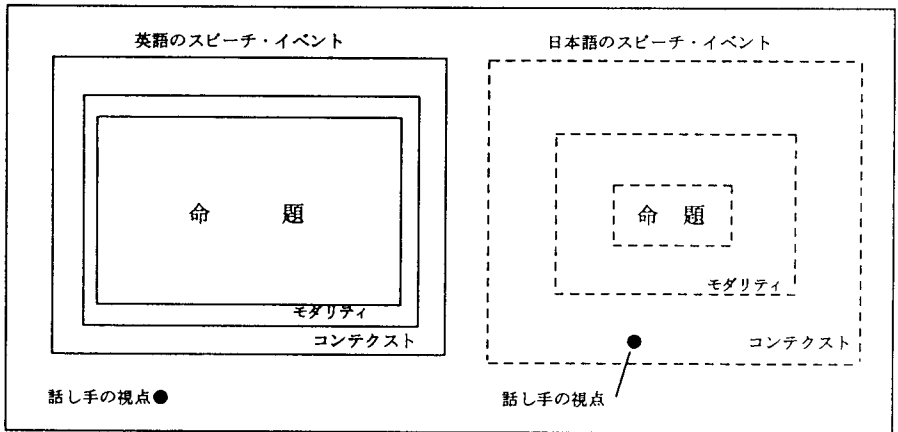


図1 日英語のスピーチイベントと話し手の視点 (井出1998:69)

井出(1995)は命題内容を述べる時の話し手の視点が言語として明示化されたものがモダリティであるとし、1998年の論文では日本語のディスコースにおける命題以外のものをすべて「プラグマティック・モダリティ」と呼び、プラグマティック・モダリティが発話における話し手の心的態度を表し、ディスコースをコントロールするのだと捉えている(注3)。つまり終助詞、指示詞、呼称、授受動詞、決まり文句、受け身、垣根表現のみならず、何を言うのか、言わないのか、又いつ言うのかというようなメタ・コミュニケーションレベルのものまでプラグマティック・モダリティに含まれると言っている。

本研究では「ポライトネス学説のフェイス」、「情報の縄張り論」、「わきまえ論」、「甘えの概念」「ウチ、ソトの区別」等がプラグマティック・モダリティの基盤をなしているとみなし、以下、日本語学習者の不適切なポライトネス表現をこれらの概念を通して分析することで、日本語教育におけるプラグマティック・モダリティという捉え方の重要性を論じる。

プラグマティック・モダリティの基盤となる概念

●ポライトネス学説 のフェイス

Brown&Levinson (1978); Leech (1983)

- ウチ、ソト Quinn&Bachnik (1994); 牧野(1996)
- 情報の縄張り論[私的領域] 神尾 (1990)
- わかまえ論 井出(1992; 1998)
- 甘えの概念 土居(1971)

学習者の発話の不適切さを考察する前に、前述のBrown and Levinson (1987)のポライトネス学説の根幹をなすフェイスという概念をここで簡単に紹介する。それ以外の概念については、分析の際、必要に応じて説明する。また、ウチ、ソトの区別の重要性に関しては本稿では取り上げないので、牧野(1996)、Quinn&Bachnik (1994)、伊藤(1998)を参照されたい。

ゴフマン(1967)によって提唱された「フェイス」という概念は必ずしも日本語や中国語の「面子」と同義ではないため、そのまま「フェイス」と呼ばれることが多いが、人間には皆、フェイスというものがあり、大抵のコミュニケーションの場において、そのフェイスは脅かされると言われている。人に何か依頼する際、頼まれる側のフェイスを脅かすことが多く、その依頼を相手が断わることは依頼者のフェイスをつぶすことになるため、相手はそれを避けようとし、断われなくなる。しかし、どうしても断わらざるをえない場合に行なう行為は「フェイスを脅かす行為」(FTA)と呼ばれ、図2に見られるように、一旦FTAを行うと決めると、伝達意図を直接的ではなく、何らかの緩和策を講じて明示する方法をとることになる。その際、相手のポジティブ・ポライトネスに働きかける方法と相手のネガティブ・ポライトネスに働きかける方法がある。ポジティブポライトネスというのは、相手によく思われたい、相手に理解されたい、親しくしてもらいたいという欲求で、聞き手のポジティブ・ポライトネスに働きかける例としては、あいづちなどで相手への興味を示したり、仲間うちであることを示したりするストラテジーが挙げられる。一方、ネガティブ・ポライトネスとは、自分の領域に他人にむやみに踏み込まれたくない、でしゃばられたくないという聞き手の欲求で、それに働き掛ける話し手のストラテジーとして、緩和表現、垣根表現を始め、間接的な言い回し等がある。一般に、アメリカはポジティブ・ポライトネス社会、日本はネガティブ・ポライトネス社会とされているが、日本人もアメ

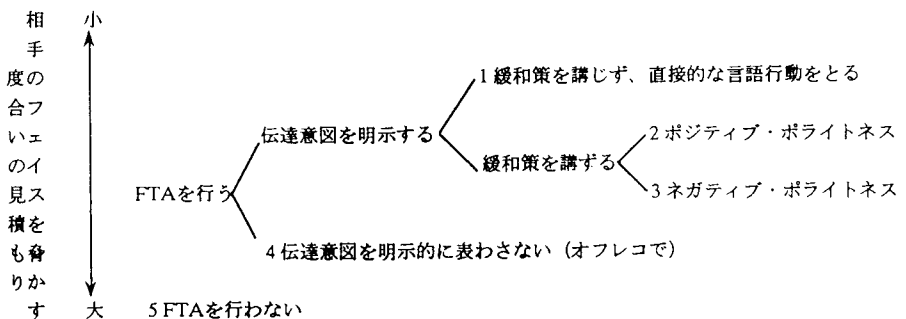


図2 ストラテジーの選択を決定する状況 Brown and Levinson (1987:60)

30 リカ人もポジティブとネガティブの両方のポライトネスストラテジーを用いることや、同一の表現が場面によってポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとしてもネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとしても用いられることが、宇佐美(1997a)の終助詞「ね」の研究や Takashi-Wilkerson(1998)の「という」の考察で明らかにされている。

ここで、誤用分析に移るが、(1)(2)(4)(5)(6)は英語を母語とするアメリカ人学習者の実際の発話を筆者が記録したもので、(3)はHubbard(1997)からの引用だが、これもアメリカ人による発話だと思われる。また、発話が語用論上不適切か否かはそれぞれの会話の聞き手である日本人(1J~4J)の反応を見て決めた。(5)はその場に居合わせた筆者の判断によるもので、(6)は後日談をもとに判断した。

まず、表1の(1)「私に編み物教えたい？」と(2)「私のカンパセーションパートナーになりたいですか。」は、母語である英語からの影響だと思われる。その理由は、英語では、聞き手が義務的必要性や欠乏を埋める必然性で依頼に応じる場合でも、聞き手の願望を押し量り、それに触れることが丁寧だと思われるため、want to ~やwould like to ~を使って願望伺いをする。その結果、大石(1996:15~16)が指摘しているように、英語の "want/would like"を直訳して、聞き手の積極的願望について尋ねる場合以外の場面でも「～たいですか／～してほしいですか」を用いてしまうわけである。例えば、相手にマーガリンを取ってもらおうなど、話し手の利益のために聞き手が行動を起こす場合に「マーガリンを取りたいですか？」と言ってしまったり、話し手が自分のために行動を起こす場合に「そこに座ってほしいですか？」等と聞いてしまったりする。これらが不適切なのは、聞き手が積極的にそういう状態を望んでいない時に、「マーガリンを取りたくない」や「すわってほしくない」といった否定願望を直接表さざるをえない状況に聞き手を追い込むことになるからだと大石は指摘している。

No. 1

(1A) 私に編物教えたい？ (友人に対して)
(1J) え？

No. 2

(2A)私のカンパセーションパートナーになりたいですか。 (知り合いに対して)
(2J) 君はどうなの？僕とやりたいの？

No. 3*

(3A)先生、その荷物、持って差し上げます。 (先生に対して)

No. 4

(4A)先生、今日のプリントとってもいいです。 (先生に対して)
(4J) ああ、それはどうも。

No. 5

(5J) あそこの牧師先生亡くなったんですって。

(下降イントネーションを伴って)
 (5A)そうか(上昇イントネーションを伴って) (年上の知り合いに対して)
 やっぱり、あのうわさ本当だったんですね。 (して)

(6A)お父さん、すみませんが、明日の試験勉強をしているので (ホスト
 トファーザーに対して)
 もう少しテレビの音小さくしていただけませんか。

(6J).....わかりました。

A=American; J=Japanese; C=Chinese * Hubbard (1996:91)

表1 アメリカ人学習者と日本人の発話

では、聞き手の利益のために、「休みたいですか?」や「このペン使いたいですか?」等と聞くのはどうだろうか。やはり、相手に「～したい」と敢て言わせるような状況は好ましくないとと思われる。それから、話し手が聞き手のために何かをする場合に、「パンを取ってきてほしい?」等と尋ねるのも不自然である。鈴木(1997)はこのような不適切さを情報のなわ張り論を使って実にうまく説明している。日本語の「です、ます」等の丁寧体世界では、<聞き手の私的領域>に関する内容の発話、つまり、聞き手の行動、聞き手に所属する物や聞き手と近い関係にある人、情報など、聞き手にかかわる全てのことがらについて話すのが避けられると言っている。中でも、特に避けるべきなのは聞き手の私的領域の中心部を成している「聞き手の欲求、願望、意志、能力、感情、感覚等個人のアイデンティティーに深く関わる事柄」であると説明している。

従って、日本語では、話し手が聞き手に何かを依頼する場合、「利益を受ける話し手が聞き手に対して負い目を感じるべき」だとされ、「～して頂けますか。」や「～して下さいませんか。」等のように、「あげる/もらう/くれる」等の授受表現を使用して丁寧さを表すことが多い。また発話(2)の「私のカンバセーション・パートナーになりたいですか。」の様に、話し手、聞き手の両者が受益者になり得る場合でも、やはり、「～していただけますか。」や「～して下さいませんか。」と言った方が丁寧に聞こえる。

依頼の際、相手に何をしていたくのかはつきりとするのが敬意を表すことになると言われているが、逆に、自分が相手に何かをするという時に授受表現を用いると、たとえ敬語を使っても恩着せがましくなってしまう。Hubbard (1997)から引用した発話(3)の「先生、荷物持ってきて差し上げます。」がこれに相当するが、このような不適切さは丁寧体世界で顕著になる(注4)。Hubbardは教室での練習の手順が原因で学生がこのような言い方をするのだと述べている。日本語の教材では、授受表現の導入、練習の際、「自分が第三者のために何かをした」というのを聞き手に報告するものが圧倒的に多く、受益者が目上か否かで「やる」「あげる」「差し上げる」の使い分けを叩き込まれるので、その結果、過剰に規則化してしまい、聞き手が受益者の場合でさえも授受表現を使ってしまうことがよくあると分析している。

さて、(4)「先生、今日のプリントとってもいいです。」という発話の不適切さは学生が先生のプリントを、つまりは聞き手である先生の私的領域の中心部を成している聞き手の能力を直接評価している点だと思われる。会話の直後、J4にあたる先生は、「ゼミの学生や大学院生と討論した後などに、今日のクラスが充実していたと言われても違和感がないが、初級日本語のクラスの学生にプリントを褒められるというのはどうも。」とおっしゃっていた。Leech (1983)はポライトネスの行動指針の一つに是認の行動指針を挙げ、「相手をけなす考えは小さく、相手を認める考えは大きく表現せよ」と言っているが、この場合はそんなに単純ではなさそうである。Ide他の共同研究(1992)でも指摘しているように、アメリカ人は"polite"という言葉で"friendly"という言葉と連想するのに対し、日本人は「丁寧な」という言葉で「親しげな」という言葉と連想しないどころか、これらの概念イメージが相反する関係にあることから、おそらくこの学生は先生に敬意を表しているつもりなのだろうが、「わきまえに準じた行動」つまり「世間の慣習的な基準に合わせた自分の位置、相手やその場の参加者、場の改まり、場の目的等を正しく確認し、それを言語表現で、的確に指標」(井出 1998:75)することができなかったと言えるであろう。

では、(4)の状況でどうしても学生が先生に気持ちを伝えたいのならどう言えば適切なのだろうか。(4)のように聞き手つまり先生の私的領域の事柄に触れるのではなく、話し手自身の領域に持ち込んで、「お蔭様で、大変勉強になりました。」や「お蔭様で難しいところもよくわかりました。」と言うことは出来る。このように視点を聞き手の私的領域から話し手自身の領域に移行するというストラテジーを用いると(3)の「先生、その荷物持って差し上げます」は「先生、お持ち致します。」となり、英語の"Would you like me to carry it for you?"からの直訳はもちろん、"Shall I carry it for you?"の直訳の「お持ちしましょうか？」よりも、なお丁寧ではないだろうか。指示を仰ぐつもりで「～しましょうか」と尋ねると、聞き手がそうしてもらいたい場合、話し手に依頼することになり、Brown & Levinsonのいう聞き手のネガティブフェイスを傷つけることにもなりかねないので、話し手自身の意志を明確にし、「お持ち致します。」と言った方が丁寧になると思われる。又、指示を仰ぐのではなく、許可を求めるという形でさらに一段階へりくだることも可能である。例えば店員の「手提げ袋の方は、お入れしてもよろしいでしょうか。」という言い方やガソリンスタンドの人の「窓をお拭きしてもよろしいでしょうか。」と言う表現がこれに相当する。

前述したように、相手のフェイスを傷つける可能性を少なくするために、話し手は何らかのポライトネス・ストラテジーを用いるのだが、ポライトネス学説によると、どんなストラテジーを選ぶかは、話し手がフェイスを脅かす行為(FTA)の大きさをどう判断するかによるとしている。つまり、話し手は、聞き手の話し手に対する「相対的力(P)」、話し手と聞き手の「社会的距離(D)」、ある行為がどのくらい相手に負担をかけるかという「負担の度合い(R)」という要素を基にして、それぞれの度合を測定し、集計し、FTA全体としての「重さ」を測る。その上で、適当なストラテジーを選択するのである。

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

W: Weightiness of the FTA (x) (フェイスを脅かす度合);
 D: Social Distance (社会的距離); P: Power (相対的な力);
 S: Speaker (話し手); H: Hearer (聞き手)
 R: Rank of Imposition (負担の度合)

その際、ある特定の行為が相手にかかる負担の度合(R)は、文化によって異なるとしており、これは日本人の言語行動を説明する上で、きわめて重要な点だと思われる。なぜなら、リーチ(1983)が「如才のなさ」(tact)を行動指針の一つとして挙げ、「相手にとって負担を意味すると思われることは、できるだけ小さく表現し、相手にとって利益を意味すると思われることは出来るだけ大きく表現する」と言っているのに対し、日本語では、話し手のために聞き手に何かを依頼する際は、授受表現を用い、受ける恩恵を明らかにするのがポライトだとされている。一見矛盾しているようにも見えるが、これは慣習とはいえ、日本人が用いるポライトネスストラテジーなのである。何故なら、敬語などは典型的に次の二つの目的で用いられるとされているからである。

(1) 聞き手の優位な立場を明確に認めることで自尊心を満足させることによって、フェイスを脅かす度合の高い状況で脅威を緩和する。
 (Green 1989/ 深田訳 1990:197)

(2) 聞き手が話し手に比べて地位と権威においてずっとまさっているので、話し手は聞き手から行動や反応を要求したり、強制したりする立場にないと暗示することで、フェイスの脅かしを最小にする。
 (Green 1989/ 深田訳 1990:197)

また、土居(1971)は、「甘えの構造」の中で以下のように言っている(1992:65)。

「敬語は文字通り自分より目上の人物を敬って使われる言葉であるが、使われる側からすれば、敬して遠ざけられたというよりも、むしろ気持ちよく感ずることは疑いない。」

さらに土井は目上に使う敬語と小さな子供に使う言葉遣いに共通点を見出し次のようにも述べている。

「...目上に敬語を使う場合にも、子供の機嫌をとると同じように、もっぱら目上の機嫌をとることが目的ではないかと考えるようになった。大体、目上に敬語を使わないと目上の機嫌を損じ、結局自分に不利を招く」(1992:65)

土井の分析が正しいとすれば、井出(1998:75)の言う「わきまえに準じた行動」というのも、結局は個人の利益追及のためのストラテジーだと見ることも可能になる。したがって、聞き手の負担が大きい時でも、例えば「大変厚かましいお願いながら、社会的にお力をお持ちのXXさまにお願いするより方法が見当たらず」などと言い、甘えることで、聞き手のフェイスを脅かすのが防げられ、相手も多少なりとも負

担には感じながらも悪い気はしないということであろう。

会話(5)で、「あそこの牧師先生亡くなったんですって。」と相手は下降イントネーションで言った直後、目下である学習者が上昇調で「そうか?」と言ったのがその場に居合わせた筆者には日本人の会話の相手に対して失礼だと感じた。

(5J)あそこの牧師先生亡くなったんですって。(年上の知り合いに対し)
 (5A)そうか(上昇イントネーションを伴って)て)
 やっぱり、あのうわさ本当だったんですね。

この学習者は日本の大学院で学んだ経験もある上級話者だけに、数少ない語用論上の不適切さが目立つゆえ、その旨を伝え、「そうですか」と丁寧体を用いるようすすめると、日本人が目上の人と話している時に普通体を使っていることが度々あるから、自分もそうただけだと説明してくれた。最近のスピーチレベルシフトに関する研究で明らかにされたように、目上との会話で普通体を使用している場合も確かにある。例えば鈴木(1997:71)の以下の例でも、目下であるAの言葉に丁寧体と普通体が混在している。但し、文末が普通体になっているのは、〈話し手の領域〉〈中立の領域〉について話している時に限られている。

A: この間はどうも有難うございました。

あれ、すごーく、きれい。

B: そうでしょ。

A: 色もいいし。

全部始めからでしょ。(手作業であることについて述べている)

B: そう

A: もっといっぱい欲しいなあ。

B: そら、よかった

A: 自分で買いたいんですけど、普通に売ってますか?

B: しょうざんにあるけど

A: しょうざん? 大阪ですか

B: 京都

A: じゃ、今度教えていただけますか?

鈴木が指摘しているように、謝辞・質問・依頼など「聞き手を目当てとした発話」ではすべて丁寧体が使用されている。従って、(5)の会話で5Aが5Bに聞き返すなど、聞き手を目当てとする場合は「そうですか」や「そうなんですか」がふさわしいが、たとえ疑問文の形に似ていても自己完結的で納得的な言葉(独り言)なら普通体でも可となる。しかし、その場合はイントネーションの制約によってそうした意味が出る。つまり下降調で言わなければならない。森山(1989)も聞き手の情報非依存型の話し手自身に向けられた発話、例えばイントネーションの下降をともなった「今何時だろう」というのは、間接的で丁寧表現にもなりうる。ここで「だろう」のいわゆる丁寧形である「でしょう」に変えるともはや独り言ではなくなり、聞き手を意識した発話となる。故に、コミュニケーションにおける聞き手情報配慮、非配慮はプラグマティック・モダリティの重要な要素であることがここで

もわかる。

さて、発話(6)は留学生が日本のホストファミリーの父親にテレビの音を小さくしてほしいと敬語を使って頼んだ時の言葉だが、この学生は翌日ホストファミリーの母親から、二度とお父さんにあんな口を聞かないようにと注意され、やはりオフレコで明示するか、何も言うべきではなかったのだとその留学生が言っていた。

以上相手にかける負担の度合(R)をマクロレベルで考察してきたが、同一文化内においても、個々の話者によってポライトネス方略に幾分相違がでる可能性があるし、話し手と聞き手の「社会的距離(D)」や聞き手の話し手に対する「相対的力(P)」の見積もりは個人個人で異なる可能性がある。それに、話し手が社会的距離を変えようとしていたり、ある一定の行動が適切かどうかを判断する場合の個人差や、話し手の性格の違いなど、変数が多く、結局は個人個人が自分のやり方に従ってポライトネス・ストラテジーを違った方法で適用するのである。また、当然のことながら、話し手の同一のストラテジーや表現に対する聞き手の解釈にも違いが見られるため、聞き手の視点をも含めたコンテキストの正しい把握こそが、適切なプラグマティック・モダリティ表現を可能にし、話し手の視点や心的態度を表しながら、人間関係を築いていくと言っても過言ではないだろう。

3 まとめ

以上、学習者の不適切な発話を、プラグマティック・モダリティという観点から考察してきたが、実際、日本語では話し手と聞き手の関係をあらわさないように話することは不可能で、Matsumoto (1989:209)が指摘しているように、今日は土曜日であるというような単純なことでも今日は「土曜日だ」「土曜日です」「土曜日でございます」というように繫辞(copula)の選択が義務づけられている。また、日本語にはこのように敬語使用の原則に「語用論的制約があるため、社会人の改まった場面の会話」で個人の意志でスピーチレベルを選択することは殆どなく、我々は「社会的規範、慣習にのっとりた言語使用」を行なうことで、お互いのネガティブフェイスを尊重するのだと宇佐美 (1997b)は説明している。

勿論、学習者に母語話者なみの運用能力を要求することは難しいかもしれない。しかし、実際の言語使用の中で、命題をモダリティやコンテキストから切り離すことが出来ない以上、たとえ初級レベルの授業であっても、ある一定のコンテキストを与え、現実の言語使用に比較的近い表現を取り入れるべきであろう。また、同じことを相手に尋ねる場合でも、相手の心理状態によって、当然のことながら相手にかける負担の度合いも変わってくる。従って、センテンス・レベルの敬語表現から、例えば相手をはっきりと断らなくてもすむように、徐々に本題に入っていきような前置きを含むディスコース・レベルでの配慮表現の指導も必要だと思われる。このような前置き(pre-sequencing)はMiller (1994)によると、日英両語に見られるポライトネス方略なので英語圏の学生にも馴染み易いのではないだろうか。

しかし、ある行為が語用論上適切かどうかを決めるのは聞き手であ

36 り、いわゆるプラグマティック・コンペテンスは、社会でいろいろな人と接する中で失敗を重ねながら身につけていくものなので、我々日本語教師に出来ることは限られている。しかし、ロールプレイ等を通し練習の場を提供したり、文化ノートという形で日本人のコミュニケーション・ストラテジーを紹介していくことが大切だと思う。実際、高橋(1998)は教室内での中間言語運用能力の習得のためにメタプラグマティック・インフォメーションを明確に与えることが最も効果的であったと報告している。

また、Wetzel の1994年に行なった意識調査によると、日本人は、相手の日本人が尊敬語のかわりに謙讓語を使ってしまう等、たとえ間違った敬語を使っても全く使わない場合よりも丁寧で人当たりがいいと感じると報告していることから、正しい敬語を使うことは勿論大切だが、それに加え、プラグマティック・コンペテンスの中核を成しているとも思える「わきまえに準じた行動」、「謙虚な態度」を教えることも必要なのではないだろう。また、それと同時に日本語が多様化する中(世代差、母語のちがいが等)、従来の物差しのみで語用論上の適切さを判断するのではなく、我々が寛容になっていくことも必要かもしれない。

注

- 1) 本稿は平成10年12月に行なわれた第九回第二言語習得研究会全国大会で発表した論文を加筆修正したものである。
- 2) 仁田(1989)は、日本語の文は、「言表事態」と「言表態度」の大きく質的に異なった二つの層から構成されていると述べているが、それらはここでいう「命題」「モダリティ」に相当する。
- 3) 井出(1998)はプラグマティック・モダリティを概念的モダリティ、相互作用のモダリティ、ディスコース・レベル・モダリティ、メタ・コミュニケーション・モダリティの4レベルに分類している。
- 4) 以下の鈴木(1997:66)の例からもわかるように、普通体世界では聞き手の私的領域にかかわる発話であっても問題がない場合がある。
A: みっちゃん、コーヒー飲みたい? 入れたげようか。
B: うん、お願い。

参考文献

- 井出祥子(1992)「日本人のウチ・ソト認知とわきまえの言語使用」『月刊言語』11号, pp. 42-53.
- 井出祥子(1995)「語用論から見た敬語— コンテクストを指標するモダリティ表現としての丁寧語—」『国文学』第40巻14号, pp. 10-17.
- 井出祥子、櫻井知佳子(1997)[1998]「視点とモダリティの言語行動」田窪行則編『視点と言語行動』くろしお出版, pp. 119-153.
- 井出祥子(1998)「文化とコミュニケーション行動—日本語はいかに日本文化とかかわるか—」『日本語学』17号, pp. 63-77.
- 伊藤ゆり(1998)「学習者の理解を助ける敬語指導をめざして—「ウチ・ソト」の原理を中心に」『ジャーナル CAJLE』第2号, pp.15-23.

- 宇佐美まゆみ(1997a) 「「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」現代日本語研究会編『女性のことば：職場編』ひつじ書房, pp. 241-268.
- 宇佐美まゆみ(1997b) 「ポライトネス理論の展開:ディスコースポライトネスという捉え方」『日本研究教育年報』東京外国語大学外国語学部日本課程編, pp. 145-159.
- 大石久美子(1996) 「～(し)たいですか？」に代表される願望伺いについて—オーストラリア英語母語話者と日本語母語話者の接触場面での問題— 『日本語教育』91号, pp.13-24.
- 土居健郎(1971)[1994]『甘えの構造』弘文堂
- 神尾昭雄(1990)『情報の縄張り理論：言語の機能的分析』大修館
- グリーン・ジョージア(1990)深田淳訳『プラグマティクスとは何か：語用論概説』産業図書
- 鈴木睦(1997)[1998]「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則編『視点と言語行動』くろしお出版, pp. 45-76.
- 高橋里美(1998)「教室内における中間言語運用能力習得の可能性」第九回第二言語習得研究会全国大会口頭発表
- 仁田義男(1989)[1991]「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義男・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版, pp. 1-56.
- 牧野成一(1996)『ウチとソトの言語文化学：文法を文化で切る』アルク
- 森山卓郎(1989)[1991]「コミュニケーションにおける聞き手情報—聞き手情報配慮非配慮の理論—」仁田義男・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版, pp.95-120.
- Bachnik, Jane M. and Quinn Charles J. Jr. (eds.) (1994) *Situated meaning--Inside and Outside in Japanese Self, Society, and Language*, Princeton University Press.
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. (1978)[1987] *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Green, Georgia (1989) *Pragmatics and Natural Language Understanding*. Lawrence Erlbaum Association.
- Hubbard, Maki (1997) "Beyond the Grammatical: Incorporating Pragmatics into Teaching." 真紀・ハバード、坂本正、ジェームズ・デーヴィス編『日本語教育：異文化の懸け橋 <三浦昭先生古希記念論文集>』アルク, pp. 85-99.
- Ide, S., Hill, B., Carnes, Y. M., Ogino, T., Kawasaki, A. (1992) "The concept of politeness: An empirical study of American English and Japanese." R. J. Watts, S. Ide and K. Ehrlich (eds), *Politeness in Language: Studies in its History, Theory and Practice*. Berlin: Mouton de Gruyter, pp. 281-297.
- Leech, Geoffrey N. (1983) *Principles of Pragmatics*. New York: Longman.
- Matsumoto, Yoshiko (1988) "Reexamination of the Universality of Face." *Journal of Pragmatics*, pp. 403-426.
- Miller, Laura (1994) "Japanese and American Indirectness," *Journal of Asian Pacific Communication*, vol. 5: 1&2, 37-55.
- Takashi-Wilkerson, Kyoko (1998) "Rethinking Power and Solidarity in Japanese Discourse: A case of no, tte and to yuu + nominal wa," *Journal CAJLE*, vol. 2, pp. 82-99.

Wetzel, Patricia J. (1994) "Contemporary Japanese attitudes toward honorifics (keigo)." *Language Variation and Change*, 6 pp. 113-147.